

#### 4. 底部内面に突起のある土器

今年度調査された川上B遺跡のD・E地区から、底部内面に突起のある土器片が1片ずつ出土した。底部内面のほぼ中心部に、高さ6mm前後の円錐形の突起を持つものである。

D地区の土器片は、同地区北部の黄褐色シルト質降下軽石層直下より出土し、平底で側面に縄文が施されているI b-3類の土器である。E地区の土器片は黒褐色土の包含層より出土し、突起部分だけの平底の破片である。この土器も、周囲の出土遺物からみてI b-3類に相当するものと思われる。これらの突起は、つまみ出しによって成形された可能性もあるが、ひび割れの状態からみると貼付して成形した可能性のほうが大きいように思われる。

類例は少ないが、今までに知りえたものを以下に紹介する。室蘭市絵鞆遺跡<sup>(1)</sup> 北見市開成遺跡<sup>(2)</sup> 幕別町猿別C遺跡<sup>(3)</sup> 登別市千歳5遺跡<sup>(4)</sup>に1点ずつ、江別市吉井の沢の遺跡<sup>(5)</sup>に2点出土しているだけである。また、網走市モコト貝塚出土の「乳房状尖底」土器片も底部内面の突起の可能性はある。この点については、石橋次雄氏がすでに指摘している<sup>(6)</sup>。

絵鞆遺跡の土器片は、エンルム・チャシ13号ピットより出土。13号ピットは「アイヌ文化期」<sup>(7)</sup>の墳墓であるが、この土器片は覆土から出土したものと思われ、続縄文時代恵山式とみられる。突起は高さ1cm以上あり、上げ底で底部側面に縄文が施されている。

開成遺跡と猿別C遺跡の土器片は縄文時代中期モコト式とみられる。モコト貝塚の土器片もモコト式土器で、これらの突起は大きく、いずれも底に縄文が施されている。

千歳5遺跡の土器片は、周囲の出土遺物からみて北筒式とみられる。吉井の沢遺跡の土器は2点とも早期コッタロ式とみられ、突起の形は川上B遺跡の土器に近い。

これらの資料は、縄文時代早期、中期、続縄文時代の各期にばらついており、一時期だけに特徴的にみられる現象ではない。強いていえば、中期モコト式に類例が多い。出土地点は、胆振、石狩、十勝、網走と広い地域にわたっている。

これらの土器片の突起が単なる整形痕ではないとするならば、その目的や機能についても検討が必要である。しかし現段階ではそれに十分こたえるだけの資料はない。今後の資料の増加を待ちたい。

- (1) 室蘭市民俗資料館保管。発掘報告には、本資料は掲載されていない。大場利夫、溝口稠昭和46年『室蘭絵鞆遺跡発掘調査概要報告書』室蘭市教育委員会。
- (2) 宮宏明氏の御教示による。開成1遺跡か開成3遺跡で採集されたい。北見市立郷土博物館保管。開成1・3遺跡の発掘調査では類似資料は出土していない。北見市教育委員会(昭和55年)『北見市開成遺跡発掘調査報告書』
- (3) 昭和57年度発掘出土品、幕別町教育委員会保管。昭和58年3月報告書出版予定。
- (4) 昭和57年度発掘出土品、昭和58年3月報告書出版予定。
- (5) 発掘報告には、本資料は掲載されていない。北海道埋蔵文化財センター(昭和57年)『吉井の沢の遺跡』

- (6) 石橋次雄（昭和57年）「北海道考古学会だより」第15号、藤本強氏も再検討の余地ありと語っている。藤本強（昭和55年）「モコト貝塚表面採集の土器」『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部。豊原照司（昭和57年）「北海道東部の土器」『縄文文化の研究』4、雄山閣。
- (7) (1)の文献による。

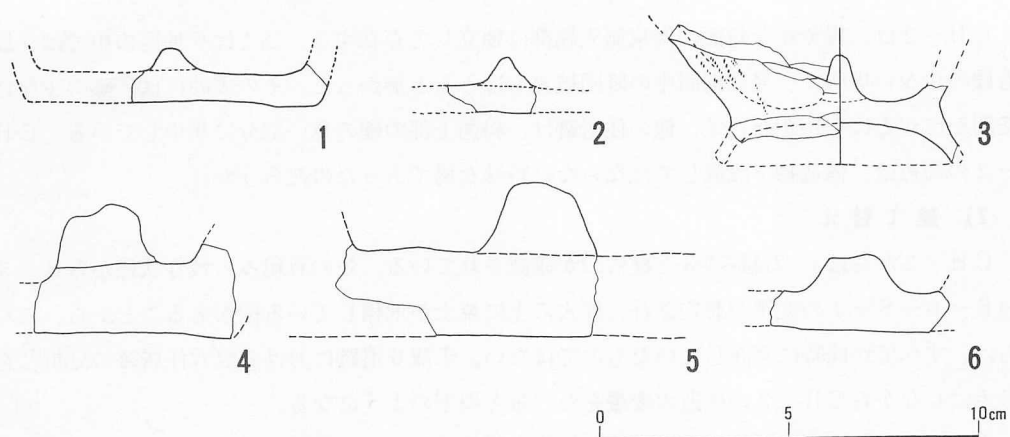
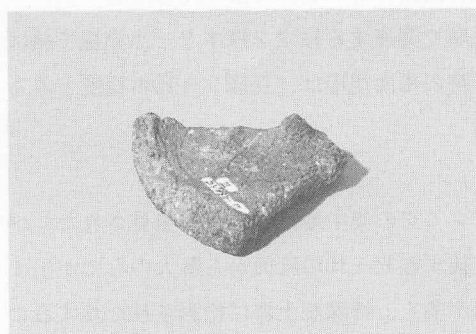


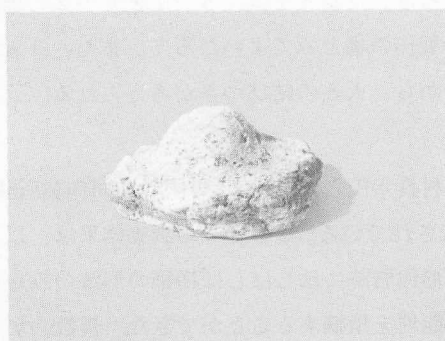
図 XI-5 1. 登別市川上B遺跡・D地区 2. 登別市川上B遺跡・E地区  
3. 室蘭市絵鞆遺跡 4. 幕別町猿別C遺跡 5. 北見市開成遺跡 6. 登別市千歳5遺跡



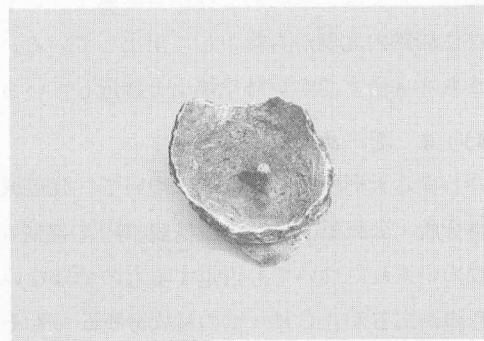
1. 登別市川上B遺跡・D地区



2. 登別市川上B遺跡・E地区



3. 登別市千歳5遺跡



4. 室蘭市絵鞆遺跡